

特別活動における指導と評価の在り方についての検討 －合唱コンクールによる中学生のコミュニケーション能力の変容－

高橋 知己*

(平成29年8月23日受付；平成29年11月16日受理)

要 旨

本研究は、中学生における合唱コンクールを題材として、特別活動の指導と評価の在り方について検討している。中学生にとって合唱コンクールは、学校生活における大きなイベントの一つである。合唱コンクールを通して、生徒や教師のコミュニケーションが変容していく。教師は、合唱コンクールへの指導を通して学級集団づくりの深化を進めようと考えますが、実際に合唱コンクールによって生徒がどのように変容しているのか、分析的に行われた研究は少ない。そこで本研究では、2年間にわたり合唱コンクール後の生徒の自由記述を収集し、質的に分析しながら、特別活動の指導と評価の在り方を提案することを目的とする。分析の結果、(1)全学年共通した変化として生徒は自己中心的な視点から他者存在の視点へと移行していくこと、(2)(1)に加え学年によって視点が異なるという特性が見られること、(3)3年生にとっての学校行事の重要性が示唆されることなど、特別活動の指導と評価の在り方に提案がなされた。

KEY WORDS

extra-activities 特別活動 homeroom-activities 学級活動 chorus-contest 合唱コンクール

1 問題と目的

思春期の生徒が不安を抱えて生活を送るとき、心の支えとなるのは友人や家族であり、教師である。学校生活において良好な人間関係を構築し、コミュニケーションを取り合うときに特別活動が有効であると考えられる。特別活動は、児童生徒の人間関係を調整し、学校教育の基底な役割を果たす我が国の学校教育において特徴的な教育活動であり、集団活動を基底とする特別活動はその意義や有用性がますます大きくなってきているといえよう。文科省のコミュニケーション教育推進会議における「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために（審議経過報告）」(2011)^①では、コミュニケーション能力を、「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ合意形成・課題解決する能力」として捉え、21世紀における多文化共生時代に極めて重要な能力と述べている。その中でコミュニケーション能力を育むために4つ挙げている。①自分とは異なる他者を認識し、理解すること。②他者認識を通して自己の存在を見つめ、思考すること。③集団を形成し、他者との協調、協働が図られる活動を行うこと。④対話やディスカッション、身体表現等を活動に取り入れつつ正解のない課題に取り組むこと。これらの要素で構成された機会や活動の場を意図的、計画的に設定する必要があると指摘している。この構成された機会や活動の場が、学校教育における特別活動であるといえる。集団活動において協力しあう過程を通して互いの理解が深め他者との関係を豊かに広げていくことや、主体的な集団活動への参加や自律的な態度を育てようとする学校行事は、協働し互いの人格を尊重し合って生きることの大切さを学び、自己実現を図るために有効な活動であると言える。

本稿では特別活動における学校行事の一つである合唱コンクールに焦点を当て、中学生の特別活動を経験したことによるコミュニケーション能力の変容について検討する。中学校の主な学校行事として体育大会や修学旅行等があげられるが、これらは学級という単位よりも学校や学年というより大きい単位で取り組むことが多い。林(2014)^②によると、大学生が自分自身の中学生時代を振り返り、最も良い印象に残っている学校行事を挙げたところ、「合唱コンクール・祭」が33.2%で最も多く、以下、「体育祭・運動会」31.4%、「修学旅行」9.4%であった。合唱コンクールは、全国的に見てもほとんどの中学校で実施されている中学生にとって学級単位で行われる数少ない学校行事であり、生徒にとっても思い出に残る行事であるといえる。指導する学級担任にとっても合唱コンクールは、学級集団づくりの一つの契機である。合唱コンクールの練習が始まる前は学級に問題がない場合でも、合唱コンクールに取り組

*学校教育学系

む過程で、周囲の協力が得られずリーダーが悩んだり、男女で思いの違いから険悪な雰囲気になったりするなど困難な問題に直面する場面が多くみられる。当然、合唱練習が始まる前から学級に大きな問題を抱えている場合はそれ以上であることは容易に想像できる。これらの問題は、生徒だけでは解決できない場合も多くある。教師は、このような問題が学級として、また生徒一人ひとりが成長する場面と捉えている。教師はこうした問題解決の過程を通して普段あまり話すことがない生徒同士が交流を深め、練習を通じた生徒個々の自主的な活動を通して、自尊感情を高め他者理解を深めていくことが学級集団づくりに有効だと感じている。蘭・高橋(2008)^③は、学級集団の再構築は、教師の力のみで達成できるものではないとし、仮に教師が主導して新たな集団を構築したとしても、それは教師にとって居心地のよい学級でしかなく、生徒にとっては決して居心地のよい学級であるとは限らないと指摘している。

合唱コンクールの学級集団に及ぼす影響について検討した研究は少ないが、高橋・金谷(2015)^④は学級集団感に及ぼす合唱コンクールの影響を中学3年生を対象にして「生徒間の親しさ」「学級内の公平さ」「教師に対する信頼感」の尺度を用いて合唱コンクールの前後に調査を行っている。その結果、男子ではどの調査項目でも有意差が見られなかったが、女子では3つの尺度いずれにおいても有意差が確認できたとしている。特に女子においては親しさと教師への信頼感が向上しており、合唱コンクールが教師生徒関係の向上や集団内の関係づくりに影響を及ぼしていることが明らかとなっている。前述のように、多くの教師が期待するように特別活動の効果はあると考えられているものの、実際にどのような指導を行えばよいのか、特別活動に対してどのように評価を行えばよいのかということは高橋(2016)^⑤が指摘するように課題が多く、より特別活動の実践的な指導と評価に結び付く方法についても検討していくことが求められている。

そこで本研究では、高橋ら(2016)^⑥が行った合唱コンクールにおける中学生のコミュニケーション能力の変容に関する調査の精緻な分析を行うとともに、生徒の記述した自由記述をカテゴリー分析に基づいて精査し、合わせて合唱コンクールという学校行事における指導と評価の在り方について検討していくことを目的とする。なお、本研究では、学年の発達段階における特徴を調べる目的として行われた調査1と前述の高橋・金谷の報告で特徴的であった中学校3年生の実態を精緻に分析することを目的とした調査2を行った。

2 調査1

2.1 調査1の目的及び調査方法

目的 合唱コンクールにおけるコミュニケーションの変容についての学年の特徴を分析する。

調査対象 T県公立A中学校に通う中学生224名(男子108名、女子116名)。内訳は、中学1年生84名、2年生74名、3年生66名である。そのうち有効であった56(男25女31)名、2年生69(男32女37)名、3年生32(男17女15)名の記述を分析の対象とした。

実施時期 合唱コンクール後の2015年11月中旬。

手続き 「合唱コンクールについての感想文」というテーマで「1:他の生徒や先生との関係やコミュニケーションに対してコンクールの前後で変わったと感じたこと、気づいたことはありませんか。2:コンクールを終えての感想をお書きください」の指示に従って自由記述された文章を分析の対象とした。また、この調査に先立ち、調査結果は成績や評価には関連がないこと、回答は無記名状態で集計され、個人情報特定されることはないこと、調査結果は特別活動研究の資料とすることのみに活用されることが説明された。また、本研究で使用した自由記述の一部は、「学級だより」等として一部保護者に公開されている。

分析方法 分析には1と2の設問に対する反応を合算する形で行った。自由記述データを基に、①内容によってカテゴリーを設定し、②そのカテゴリーの妥当性を検討して修正し、③カテゴリー判断の一致率を確認するために相関係数で確認したところ1回目は0.621、2回目は0.525であった。④この結果を受けて再度カテゴリー分類の定義を検討し直して一致率を確認したところ、6回行って0.798~0.983であったので妥当性が高いと判断した。

2.2 調査1の結果及び考察

収集した自由記述データ 回答された自由記述データは、原文に忠実にリライトして文字データとした。設問1と2に回答し収集されたデータの文字数平均は、1年生が162.9文字、2年生が224.4文字、3年生が232.0文字であった。

分析方法 自由記述データを基に、特別活動研究に関心を持つ研究者、現職教員、大学院生の6人でカテゴリーを設定し、分析を行った。一人の文章の中に複数のカテゴリーに所属するものはその都度カウントした。その手順は、①内容によってカテゴリーを設定し、②そのカテゴリーの妥当性を検討して修正し、③カテゴリー判断の一致率を確認するために、4人のカテゴリー判断を相関係数で確認したところ1回目は0.621、2回目は0.525であった。④この結

果を受けて再度カテゴリー分類の定義を検討し直して一致率を確認したところ、6回行って0.798～0.983であったので妥当性が高いと判断した。その結果、作成されたのが、表1である。さらに、表1のカテゴリーの出現数を表したのが、表2である。さらに出現したカテゴリー数を学年間で比較しカイ二乗検定を行ったものが表3である。

結果及び考察 分析されたカテゴリー及びサブカテゴリーは以下の通りである。観察された事象について自らの感情を込めずにそのまま記述している『感情随伴なし』に分類された「1：観察した事象」、『自己評価・他者評価』に関する記述が含まれている「2：肯定的自己評価」「3：否定的自己評価」「4：肯定的他者評価」「5：否定的他者評価」、『満足感』を著した「6：満足感」「7：不満足感」、自他の『相対的比較』に関する記述である「8：改善への期待」「9：他学年・学級への憧憬」、そして『教師、その他』カテゴリーに分類した「10：教師への反応、その他」の10のサブカテゴリーである。共通した反応としては、「2：肯定的自己評価」「4：肯定的他者評価」これらのことから合唱コンクールのもつ教育的効果が確認できたといえよう。「6：満足感」が高かった。次に学年ごとの特徴を見ていこう。1年生の特徴として、満足感と否定的他者評価が有意に高かった。1年生は、他人のことを批判的に捉えることにより、満足感を高めていると考えられる。また教師への反応、その他に関しては有意に低く、教師との関わりが十分ではなかったのではないかと推察される。2年生の特徴として、観察した事象と改善への期待・提案が有意に高かった。また、満足感が有意に低く、不満足感が有意に高いことから、2年生は上級生と自分たちのクラスの

表1 自由記述から作成したカテゴリー表

カテゴリー	サブカテゴリー	定義
感情随伴なし	1：観察した事象	パートごとに練習していた。
自己評価・他者評価	2：肯定的自己評価	指揮者が「やるよー。」と声をかけると、私は「しー。」とみんなに言えるようになった。
	3：否定的自己評価	表情があまり意識できなくて、笑顔を忘れてしまい銀賞だったのがとても悔しかったです。
	4：肯定的他者評価	合唱練習の時に指揮者が指示を出すとみんなが素直に従っていた。
	5：否定的他者評価	女子はこの方法で静かになったけど男子は何をしても歌い終わったら話し合ったり遊びだしたりしていた。
満足感	6：満足感	終わってから自由曲も課題曲もしっかり歌えてよかった。
	7：不満足感	ただでさえ悪かったのにもっと悪くなって困った。
相対的比較	8：改善への期待・提案	来年はしっかりと練習して最優秀賞が取れるように頑張りたいです。
	9：他学年・学級への憧憬	2年1組だけ賞が偏ってしまって2年2組にはとても申し訳ないと思いました。
教師、その他	10：教師への反応、その他	先生の今までの経験からいろいろ教えてくださいまして合唱練習にも熱心に協力してくださった。

表2 カテゴリー別出現数【実数】

サブカテゴリー	学 年		中 2		中 3	
	中 1	中 2	中 1	中 2	中 1	中 2
	男	女	男	女	男	女
1：観察した事象	0	1	4	7	0	1
2：肯定的自己評価	10	12	18	20	9	11
3：否定的自己評価	0	1	1	2	1	0
4：肯定的他者評価	6	15	23	23	15	14
5：否定的他者評価	5	3	2	5	2	1
6：満足感	16	26	24	31	14	15
7：不満足感	2	2	6	6	0	0
8：改善への期待・提案	4	4	12	6	0	0
9：他学年・学級への憧憬	3	1	3	9	1	1
10：教師への反応、その他	0	0	3	3	1	1
合計	46	65	96	112	43	44

練習の様子を比較して、合唱コンクールへの自分たちの取り組みに満足していないことが分かる。また、次年度が最終学年であることへの期待も高く、改善しなければいけないとする意思が感じられる結果となっている。3年生の特徴は、肯定的他者評価が高く、不満足感と改善への期待・提案が有意に低かった。3年生は最終学年であるため、改善への期待・提案は見られない。級友と円滑なコミュニケーションをとれるようになり、肯定的な他者評価が増え、それが不満足感の低減につながっていることが示唆される。

また男子では2・3年生に比べて、1年生は肯定的他者評価(-1.974, $p<.05$)が低く、否定的他者評価(2.184, $p<.05$)が高かった。1年生男子は、他者の取り組みに否定的である。2年生は、否定的他者評価が低く、観察した事象と改善への期待・提案が有意に高かった。2年生になると級友や上級生など周りの様子を見ることができるようになり、他者に否定的な評価をしなくなると考えられる。3年生は、肯定的他者評価が高く改善への期待・提案が有意に低かった。3年生になると級友の取り組みや活躍に肯定的な視線を向けられるようになっていっている。改善への期待・提案を低減させているのは最終学年であることが影響していると考えられる。特に男子においては学年が上がるにつれて他人への評価が高くなる傾向が顕著で、合唱コンクールが生徒のコミュニケーション能力に肯定的な影響を与えていると言える。学年が上がると自己中心的な視点から他者への視点へと変容していることがわかる。

表3 学年間の比較

サブカテゴリー	1年	2年	3年
1: 観察した事象	-1.615 ns	2.448 *	-1.227 ns
2: 肯定的自己評価	0.036 ns	-0.745 ns	0.869 ns
3: 否定的自己評価	-0.371 ns	0.395 ns	-0.078 ns
4: 肯定的他者評価	-1.375 ns	-0.744 ns	2.399 *
5: 否定的他者評価	1.666 +	-1.072 ns	-0.504 ns
6: 満足感	1.818 +	-2.05 *	0.523 ns
7: 不満足感	-0.214 ns	1.941 +	-2.131 *
8: 改善への期待, 提案	0.406 ns	1.898 +	-2.752 **
9: 他学年・学級への憧憬	-0.498 ns	1.34 ns	-1.091 ns
10: 教師への反応, その他	-1.752 +	1.358 ns	0.249 ns

+ $p<.10$ * $p<.05$ ** $p<.01$

表3によると満足感は1年生が有意に高く、不満足感は3年生が有意に低い。このことは、1年生は合唱コンクールに参加する喜びや満足感が他の学年に比べて高く、学年が進むにつれて満足感だけではなく、課題達成できたことによる不満足感の減退が生じたものと考えられる。前述したように女子に比べて男子生徒は、合唱コンクールの練習を通してコミュニケーションの質・量が拡充していき、学年が上がるにつれ肯定的他者評価が高まっている。合唱コンクールは男子生徒のコミュニケーション能力を高めていると言えよう。今後、合唱コンクールにおける指導の在り方として、1年生に対するコンクールの指導がポイントとなるのではないだろうか。1年生の否定的他者評価と満足感が有意に高いことに注目すると、1年生はコンクールをやり遂げたことで満足感を得ているが、他者との協働における苛立ち等の原因を他者へ帰属する者も多いと考えられる。1年生には次年度の合唱コンクールを意識させるような事後指導を行うことで、他者評価に捉われず改善に向けて奮起することを促すことができると考えられる。

3 調査2

3.1 調査2の目的及び調査方法

目的 中学3年生の合唱コンクールにおけるコミュニケーション能力の変容についての分析を行う。

調査対象 T県公立B中学校に通う中学3年生74名。そのうち有効回答であった35（男18女17）名分の記述を分析の対象とした。

実施時期 合唱コンクール後の2016年11月中旬。（調査1の約1年後である。）

手続き 「合唱コンクールについての感想文」というテーマで「1：他の生徒や先生に対してコンクールの前後でコミュニケーションをとって変わったと感じたことはありませんか。2：コンクールを終えての感想をお書きください」の指示に従って自由記述してもらった文章を分析の対象とした。また、この調査に先立ち、調査結果は成績や評価には関連がないこと、回答は無記名の状態で集計され、個人情報特定されることはないこと、調査結果は特別活動研究の資料とすることのみに利活用されることが説明された。

3.2 調査2の結果及び考察

収集した自由記述データ 回答された自由記述データは、調査1と同様に処理した。設問1と2に回答し収集されたデータの文字数平均は、3年生が222.0文字であった。

分析方法 自由記述データを基に、特別活動に関心を持つ研究者1名と大学院生7名によって分析を行った。その方法は①内容によってカテゴリーを設定し、②そのカテゴリーの妥当性を検討して修正し、③カテゴリー判断の一致率を確認するために相関係数で確認したところ1回目は.641、2回目は.760であった。④この結果を受けて再度カテゴリー分類の定義を検討し直して一致率を確認したところ、最終的に.778であったので妥当性が高いと判断した。

その結果、作成されたのが、表4である。さらに、表4のカテゴリーの出現数を表したのが、表5である。

結果及び考察 分析されたカテゴリーは、調査1とは3つのカテゴリーにおける相違点があった。異なっていた点は、『満足感』のカテゴリーに分類されるサブカテゴリーである。調査1では、「6：満足感」「7：不満足感」の2つだけであったサブカテゴリーだが、「6：クラスの活動に対する満足感」「7：賞に対する満足感」「8：クラスの活動に対する不満足感」「9：賞に対する不満足感」と設定した。これは、分析している際にクラスに対することと賞に対することへの記述が特徴的であり、サブカテゴリーを設定する必要があったためである。特にクラス全体に対する満足感を記述したものが多く（全体の29.6%）、3年生の特徴として挙げられる。さらに『相対的比較』カテゴリーにおいても、調査1では「8：改善への期待・提案」「9：他学年・学級への憧憬」という2つのカテゴリーだったものが、「10：今後に対する期待・不安」「11：改善への期待・提案」「12：他学年・他学級への関心」と3つに設定された。特に今後への期待や不安が、合唱コンクールをきっかけとして記述されていたのは、一つ一つの学校行事を区切りとして、卒業や受験という目前の節目に向かっていくことへの不安や決意の表れであるといえる。中学校3年生という時期や段階の特質を反映している。また、『教師への反応、その他』のサブカテゴリーを「13：教師からの影響」「14：その他」と分割した。これは教師に対する記述が女子生徒にまよって見られ、信頼感が醸成されている様子がうかがえたからである。

カテゴリー別出現数を表した表5によると、「2：肯定的自己評価」「4：肯定的他者評価」「6：クラスの活動に対する満足感」のサブカテゴリーで男女ともに多かった。自己評価ばかりではなく、他者や学級全体に対して肯定的に反応していることがわかる。男女間に大きな差はあまり見られず、同じような傾向にあることがうかがえる。

4 全体考察及び実践への適応可能性

合唱コンクールという、中学校における大きな学校行事は生徒のコミュニケーションに大きな影響を与えていることが確認できた。調査1の結果が示すように、学年が進むにつれて肯定的他者評価が増え、不満足感が減っていく傾向がみられることから、学年の発達や、自己中心性から他者への配慮へと変容していくことが確認できた。

学年の特徴をここで整理してみると、中学1年生は否定的他者評価が高い反面、満足感も高い。これは、1年生は自己中心的なため相対的に他人に厳しい視線を向けがちになるものの、初めて経験する中学校での合唱コンクールで、学級という集団で活動することのやりがいを感じるのではないかと考えることができる。学級担任の指導としては、友人関係に配慮しつつ他者を否定しないで尊重し合うこと、学級として作り上げていくことの良さを伝える方向で指導していくことが良いと思われる。そのため、個人個人の頑張りや評価を認めながら次第に他者へと視線が向かうように指導することが求められる。2年生の特徴としては、満足感が低く不満足感が高いこと、感情を随伴

表4 作成したカテゴリー表（調査2）

カテゴリー	サブカテゴリー	定義
感情随伴なし	1：観察した事象	三つのパートに分かれて歌っていた。
自己評価・他者評価	2：肯定的自己評価	今まであまり仲が良くなかった人とも話したりできるようになった。
	3：否定的自己評価	今まで少しひどい接し方だったかもしれないと思いました。
	4：肯定的他者評価	A君の指揮がサビの前のところに動作を付けていたのがすごくわかりやすくいいと思いました。
満足感・不満足感	5：否定的他者評価	Aくんは声が小さかったので、もう少し大きな声を出してほしいです。
	6：クラスの活動に対する満足感	クラス全員の絆が今までより深まった。
	7：賞に対する満足感	最優秀賞をとれて、本当にうれしかった。
	8：クラス活動に対する不満足感	みんなあまりやる気がなかった。
相対的比較	9：賞に対する不満足感	最優秀賞や伴奏者賞、指揮者賞などすべて隣のクラスにとられたので残念な結果となった。
	10：今後に対する期待・不安	もうふらふら遊んでる時間は終わったのかなと思いました。
	11：改善への期待・提案	これから受験とかに活かしたい。
教師とのかかわり	12：他学年・他学級への関心	他の学年もとても声が出ていてすごかった。
	13：教師からの影響	前日に先生から人生で最後のコンクールの人もいると聞き、このメンバーで最後だし、自分も人生で最後のコンクールかもしれないと思って、胸が熱くなった。
その他	14：その他	何も変わってないと思います。

表5 中学3年生のカテゴリー別出現数【実数】

サブカテゴリー	コミュニケーションの変容+感想における出現数（実数）	
	男子	女子
1：観察した事象	0	1
2：肯定的自己評価	10	14
3：否定的自己評価	5	3
4：肯定的他者評価	10	6
5：否定的他者評価	5	5
6：クラスの活動に対する満足感	19	21
7：賞に対する満足感	5	6
8：クラスの活動に対する不満足感	3	3
9：賞に対する不満足感	1	0
10：今後に対する期待・不安	3	3
11：改善への期待・提案	1	0
12：他学年・他学級への関心	1	2
13：教師からの影響	0	3
14：その他	4	1
合計	67	68

しない観察した事象が多いことが挙げられる。合唱コンクールに対しての不満が多く、改善要求も高いのだが、自他への視線には肯定も否定もせず、いわゆる熱くならず白けた対応をしている様子が浮かぶ。指導を行う際には、学校行事への参加を生徒に押し付けることなく集団活動の楽しさややりがいや成長を認め合ったりすることで意欲的な取組ができるような努力が担任には求められる。そのためにも、成長したことや努力したことを個人に対しても集団に対しても適切に評価し、承認する態度を示すことが重要であると思われる。3年生は調査1、2に共通して言えるのは、他者評価が高いという点である。自分のことだけでなく周囲の努力にも目が向けられるように

なっていることを表している。調査2にあるように改善期待だけではなく、合唱コンクールを通して将来の自分へ役立てたいことや卒業への意識も高まることが確認されており、この時期の指導のあり方としては、教師が動機づけたり支援したりすることは重要であるが、それ以上に生徒の自主性を尊重しそれぞれが自分なりの自他への評価を行えるように見守る姿勢が大切であると思われる。

中学生という発達段階における合唱コンクールは、それぞれの学年において特徴を持ちながら確実に生徒たちのコミュニケーション能力に変容を与え、個人や集団の在り方を学ぶ機会としての学校行事、合唱コンクールの有効性が確認できた。学年や男女の特性に応じて指導のあり方や評価の仕方を工夫しより効果的に学校行事に取り組むことが、児童生徒にとっての人間関係形成力やコミュニケーション能力の涵養に大きな影響を及ぼすことが期待できると思われる。

5 今後の課題

本研究においては、2年間にわたり中学校の学校行事の中心的な活動である合唱コンクールを取り上げ、そこに生起するコミュニケーションの変容のありようについて分析してきた。しかし、実際に調査対象者はそれほど多くはなく、一般化できる知見を得られたとまでは言及できない。今後さらに調査を継続しながら、コミュニケーション能力に関するメカニズムや展開、拡張性についても検討していくことが、特別活動における教育活動の資質能力の向上につながるものと考えられるため、さらにデータを収集し精緻な分析を行っていくことが課題である。

(本研究は、JSPS科研費(基盤研究(C)(一般)、課題番号15K04487 研究代表者高橋知己の助成を受けている。)

謝辞

本研究にご協力いただいた富山県南砺市立城端中学校の金谷諭教諭に感謝申し上げます。

引用・参考文献

- (1) 文部科学省 (2011) 「子どもたちのコミュニケーション能力を育むために」(審議経過報告) コミュニケーション教育推進会議 (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/1310607.htm)
- (2) 林幸克 (2014) 「教師教育における学校行事の在り方に関する試論－教職科目「特別活動と学級経営」履修学生の意識・実態に基づく検討－」岐阜大学教育学部教師教育研究 第10号, pp.109-118.
- (3) 蘭千壽・高橋知己 (2008) 『自己組織化する学級』誠信書房, p.13.
- (4) 高橋知己・金谷諭 (2015) 「中学校の学級集団感に及ぼす合唱コンクールの影響」日本教育心理学会総会発表論文集 第57集, p354.
- (5) 高橋知己 (2016) 「第8章特別活動の評価」『最新特別活動論』大学教育出版, pp.81-91.
- (6) 高橋知己・金谷諭・岩澤美咲・岩本知絵・田邊雄也・堀江奈央 (2016) 「合唱コンクールが中学生のコミュニケーション能力に及ぼす影響」日本学校心理士会2016年度大会発表論文集 pp.64-65.

A study on instruction and assessment of extra-activities. – Transformation of the communicative competence of the junior high school student by the chorus contest –

Tomomi TAKAHASHI*

ABSTRACT

In this study, we consider the instruction and assessment of extracurricular activities, especially chorus-contest as a subject. The chorus-contest is a major event for many students in junior high school. Students' and teachers' communication transformation is apparent during the chorus-contest. Teachers use the event to improve classroom management. However, few studies analyze students' transformation. The purpose of the present study is to propose improvements to the way extracurricular activities are instructed and assessed using a qualitative approach. The results were as follows: (a) students' attitude switched from themselves to others; (b) students' viewpoints varied with grades; (c) grades are particularly important for third-year students. The present results can be used as guidelines for the instruction and assessment of extracurricular activities.

* School Education